

ジョン・アップダイク（四）

—求愛 (Courting) の時—

岩 元 巖

(1) 少年時代の女友達のこと

前章で「父と息子」という観点から彼の最後の短編集『父の涙』をとりあげ、さらに 60 年代の代表作であった『ケンタウロス』について述べてきた。また二章では「母と息子」という観点から論を進めたのだが、その中で 50 年代に書いた重要な短編「飛翔」に登場する彼の女友達、モリー・ビンガマンについて少し述べた。この章では、この女友達を含めアップダイクが少年時代から青年期にかけて実際に深い関わりを持つことになった女性たちを主人公として虚構化した小説について述べながら、彼が結婚に至るまでのことを、私自身の推測と、彼の自伝をまじえながら述べていきたい。

アップダイクはさながら「私小説」を得意とした日本の作家たちのように、自己の生活（性生活を含め）をかなり明確に、かつ巧みに利用し、作品として昇華させることのできる人だった。この事は、彼の出世作となった『走れ、ウサギ』（1960）の中での性描写にも良く表われている。60 年代初頭に、アメリカ小説はかつて暗黙のタブーとなっていた性描写の壁を破るのだが、その典型的例としてジェイムズ・ボールドウィンの『もうひとつの国』(Another Country, 1962) と共に、アップダイクのこの作品が挙げられるほどである。

アップダイクは少年時代から優等生ではあるが、異性への関心、それも性的関心が強かった。『ケンタウロス』の中で主人公のピーターを(その心を)を鎖で縛りつけているものとして、自分の体じゅうにできている乾癬と吃音癆

を意識していた、とあったが、これはアップダイク自身の少年時代の二つの肉体的欠点で、女友達を持つには、その欠点を自分に意識させることのない女性をと考えていたようだ。

もちろん、アップダイク自身は小説の中で書かれるピーターほど内気で、孤独な少年ではなかったと思われる。背は高く、ハンサムで（成人した若き作家として本のジャケットに載っている彼はなかなかの美青年である）、しかも学業成績は郡 (Country) 一番、卒業時には学生総代をつとめ、「飛翔」の中で描かれるように「討論チーム」の主将として、他校との試合に出ている。自意識の強い少年ではあっただろうが、現実のアップダイクはシリングトンという田舎町では有名人であったに違いない。この後で述べることになるが「エリザンヌと歩く」(“The Walk with Elizanne”)の中で、アップダイク自身がよく遊びにいていたメイミーという級友の母親がよく口にしていたという言葉 “David will go places.” 「デイヴィッドは必ず出世するよ」のとおり、町では彼は必ず将来成功する人と考えられていたのである。むしろ、彼が少年時代に 女友達を対象にした劣等感がかえって彼を作家に仕立てあげる強い自意識となっていたと考えた方がよいのだろう。

何しろ、アップダイクの少年期から青年期への経歴を考えると、彼は優秀すぎ、恵まれすぎている。高校をトップで卒業し、奨学金つきでハーヴァード大学に迎えられ、優等で卒業し、すぐさまオックスフォード大への留学をフルブライト奨学金で実現している。大学の三年次を卒えた時点で結婚し、ハーヴァード大の歴史ある文芸誌『ランブーン』(Lampoon)の編集長であり寄稿者。そして留学から帰国してすぐさま『ニューヨーカー』誌の専属作家となり、有名なコラムである「街の話題」(“The Talk of the Town”)を担当し、そのかわり、同誌に短編小説を次々に発表し始めたのである。だから、第二作の長編『走れ、ウサギ』が大成功を収めた時、ノーマン・メイラーが『エスクワイヤー』誌⁽¹⁾で「彼 (アップダイク) は文壇の大通りを車をつらねて、『ニューヨーク・タイムズ書評』誌がサイレンを鳴らし、バイクで先導し、キャディラックで続く『ニューヨーカー』誌の詩神のごとく収まって、名声をあげた」⁽¹⁾と皮肉に述べたほどであった。

だからこそ反対に彼は少年時代に自分が強く意識したに違いない「劣等感」が重要だったと思える。劣等感を意識することにより、世間の眼が見る優等生とは違う人間 (少年) の生活、自分の特異な世界 (祖父母と両親と古い石造

りの農家で暮し、無能な教師としての父、優れてはいたが周辺の女たちから孤立していた母に守られていた)を冷静に見つめる眼を密かに養っていたに違いない。後に作家としての彼がシリングトンとそこに生きる人々の生活を自らの作家生活の「鉅脈」と考えた理由も、その作られた「劣等感」に彩られた視点があってのこと、と推測できる。

もう一つ、アップダイクが作家として成功した理由がある。それは彼が1955年から勤めた『ニュー Yorker』誌のスタッフ・ライター職をわずか2年で辞め、ニューヨークを離れ、ボストンの北およそ20マイルの地にあるイップスイッチという海浜の地に住み、作家生活に専念したことであろう。まだ本格的長編も出ておらず、短編作家として認められてきていたものの、これは自ら求めて背水の陣をしいたようなものである。当時の若い作家たちはこぞって何らかの大学に求められて「居住作家」(“Writer-in-Residence”)の地位を得て、生活の安定を考えたものだが、アップダイクは生涯大学に所属することなく、自分の筆一本で書き続けている。

少し、余談となったが、本題に戻れば彼が少年時代に強く意識していた欠点(乾癩と吃音癖)を少しも彼に感じさせることのなかった少女が高校4年生の時に現われている。この女性が、小説の中でモリー・ビンガマンとして登場している。

モリーは「飛翔」の中では、少し知性味のない女性、少年主人公の母親から皮肉な眼で見られる人物として登場するが、「エリザンヌと歩く」にも主人公の記憶として登場してくる。そこでは、「やがてまもなく彼は最初の、本当の意味での女友達を持つことになった。一年下の子で、彼に自分の乳房を愛撫させてくれ、そして駐めた車の中でほとんど裸同然、魚のように滑らかな姿を見せてくれた」⁽²⁾と書かれている。(アップダイクはさりげない形で、自伝的事実を二度、三度とまったく別の作品で使っているので、ここでも、この「魚のようになめらかな」身体を見せてくれた女性が、先に述べたモリーと同じ人物ではないか、と推測することができる)。

だが、この「エリザンヌと歩く」という短編から推測すると、同級生のエリザンヌという女性が彼の少年時代の最初の女友達だったとも推測はできる。彼らは共に1950年にシリングトン高校を卒業しているが、小説はその50年後、つまり2000年に故郷で同窓会を開くことになり、それを背景に小説が展開されることになっている。

主人公の語り手はデイヴィッド・カーン（これはアップダイクが自分をモデルとした時によく使う名前）という作家で、二度目の妻のアンドレアを伴って、この50周年同窓会に出席するため、ボストンからペンシルヴァニアの故郷を訪れてくる。物語の前半では、メイミー・コーフマンという同級生で、小学校の教師をしていた女性が今は末期の癌で入院しているのを見舞うことが語られる。メイミーは主人公の幼い頃からの友人で、特にその母親のコーフマン夫人がデイヴィッドを可愛がってくれていて、彼の父親の授業が終るまで彼を家に置いてくれた女性である。ちなみに、メイミーとは仲が良かったが、デイヴィッドの女友達ではなく、彼女は初期の短編「僕の最高の幸せ」(“The Happiest I’ve Been”)⁽³⁾の中にジューン・コーフマンという名の同級生が登場しているので、これがメイミーと同一人物と考えられる。

彼女を見舞い、その後夫婦は同窓会のパーティに出、懐かしいがすっかり変わったかつてのクラスメイトとその伴侶たちと談笑する。そこへ会の幹事をつとめるセアラという女性が一人の素敵な女性を連れてきて、デイヴィッドに引き合わせる。「素敵な装いをした女で、黒い瞳に、それによく似合う黒い髪。短くととのえたその髪に、品よく白いものがまじった女」⁽⁴⁾。そしてセアラは「この人、誰かわかる？」と訊ねる。デイヴィッドはなかなか思いだせないが、やがて彼女の名前、田舎町では非常にしゃれた名前“Elizanne”「エリザンヌ」が口から出てくる。だが、彼にはまだはっきりとは思いだすことができず、ただ「彼女はクラスの中でそれほど目立った女性ではなかったのに、今は年をとってかえって誰よりも美しくなっていた。身につけているドレスも緑青色の絹で、地味な色合いながら高価なもので、いかにも郊外族風だった」⁽⁵⁾ 明らかにこの50年の空白の間に、彼女がすっかり成功しているのがよくわかる装いだった。彼女の主人というのも立派で、二人はお似合いのカップルだった。会が終りに近づいた頃、それぞれの連れ合いたちが他の人々の間にまぎれこんでいる時、エリザンヌが再びデイヴィッドのそばにやってくる。そしてこう告白する。

「デイヴィッド、わたし長い間いつかあなたに言っておきたいことがあるのよ。あなたはわたしにとってとても大切な人だったの。だって、初めてわたしを家まで歩いて送ってくれ——そしてわたしにキスしてくれた人でしたのよ」⁽⁶⁾ と。

デイヴィッドは良くは思いたせないのだが、「歩いて送っていったのを憶えている」とその場は答えるが、やがてパーティの後、ホテルに戻り、ベッドに妻のアンドレアの隣に横たわっている時、次第にエリザンヌとのことがはっきりと記憶に甦ってくる。たしかに、デイヴィッドは恋に近い感情を抱きながら、エリザンヌにキスをし、あたたかい感情を持ったのにもかかわらず、彼女の裕福な家と環境に気おされてしまい、彼女もまた地味な育ちの良い女性が初めてのキスを体験してから、少し派手となり、他のクラスメートたちと交際することになり、自然に離れていってしまったのである。しかし、最初の大人びたキスの思い出をしっかりとデイヴィッドは記憶の中で取り戻して、小説は終わっている。

1950年代の高校生たちの間では、「ネッキング」(“Necking”)という言葉と行為が大はやりだった。具体的な性行為までに至らなくても、その寸前にまで及ぶ性行為を少年少女たちは実践していた。まだセックス解放という時代ではなく、厳しい保守主義のもと、“Decency”と“Respectability”という言葉が家庭で重要視されていた時代に、十代の少年少女たちがすでに性的解放を求めている遊びと言うべきであった。

エリザンヌのことを書いた作品の中で、デイヴィッドはそのすぐ後に一学年下のモリーという女性を自分の「真の意味での女友達」にしたことを述べている。これは、すでに第二章で「飛翔」という短編について書いたときに指摘したように、実際のアップダイクの高校四年生の時の女友達をモデルとしている。前にも述べたが、彼の自伝『自意識』にその女性について、こう記している。

ぼくは(少年時代に)しょっちゅう恋をしていたが、高校四年まではいわゆる本当の意味での女友達というのは持っていなかった。彼女はノラという名の三年生の女子だった。ぼくの唯一の女友達だったが、彼女だけで充分だった—感受性も強く、素敵な身体をしていて、ぼくのことを好いてくれていた。⁽⁷⁾

ただ、自伝ではあるけれど、ノラというのは実名ではないだろう。この女性のことは「飛翔」の中で詳しく書いたので、ここでは省くが、その後町か

ら引越してしまい、再開することはなかった。とこの後にアップダイクは記している(ただし、他の作品の中で、オルトンの病院に看護師として戻ってきているということが、名前を示さずに述べられていることがある)。そして、また、すでに「飛翔」について述べたように、彼はこの女性に溺れこんでしまうことを意識的に拒んでいる。自伝の中でも、ノラのことを書いた後、「ぼくにとっての完璧な女性はぼくをシリングトンから連れだしてくれる女(ひと)で、ぼくをそこに引きずりこむ女性ではなかったからだ」⁽⁸⁾、と記している。

(2) 「ぼくにとっての完璧な女性」

アップダイクは1950年の秋、ハーヴァード大学に進学し、学寮生活を始めている。この一年生の学生時代のことは「キリスト教徒のルームメイトたち」(“The Christian Roommates”)に書かれている。この短編は直接自身の分身を主人公に選ばず、サウス・ダコタ州出身の医学専攻を志望するジークラーという青年を主人公としているが、学業の厳しさなど、あるいは同じ寮の学生たちの生活などアップダイクが体験したことを素材としている。特にハーヴァードでは一年次の秋学期、勉学と課題が厳しく、学生たちの優秀さが問われていく時期で、何人かが次々に脱落していく姿も描かれている。(ハーヴァード大では一時期この短編を新入生たちのオリエンテーションに読ませたことがある、とアップダイクは述べている。⁽⁹⁾)面白いことに、アップダイクは自分のことをデイヴィッド・カーンというペンシルヴァニアの田舎町出身の皮肉屋で、他の学生たちから超然としている神経質な作家志望の青年として登場させている。常に優等生だった彼が自分を他の学生たちの中で、客観的に見た姿として貴重な資料である。

このアップダイク青年が自分にとっての「完璧な女性」を見出したのは、どうも推測からして二年次の晩秋から冬にかけての頃だったと考えることができる。この女性が彼の最初の妻となるメアリー・ペニングトン(Mary Pennington)である。彼女は自伝の中で書かれているノラや短編に登場してきたモリーとは違い、大変に知的で、かつ気性の強い才媛だった。シカゴ第一ユニテリアン教会の牧師を勤めていたレスリー・ペニングトンの長女として生れ、シカゴで成長し、シカゴ大学付属高校からケンブリッジにある私立名

門校であるバッキングガム校を経て、ラドクリフ大学に進学している。

父親のペニングトン牧師はもともとヴァーモント州のクエーカー教徒の家に生れ育った人で、牧師になってからも非常のリベラルな物の考え方をし、自然を愛した有名な宗教家だった。ただ、妻を早くに亡くし、自身晩年にアルツハイマー型認知症となり、老人施設でなくなっている。このことは「父の涙」の中で、アップダイクの父親と対照的な存在として描かれている。

メアリーはアップダイクより二歳上で、ラドクリフ大学で学んでいた頃、美術史のクラス（当時、ハーヴァードとラドクリフは兄妹校で、共通に授業を受けることができた）でアップダイクと出会っている。彼女は1952年に卒業し、その翌年の6月にアップダイクと結婚している。彼女は卒業してからしばらく私立高校で美術を教えていたが、アップダイクが1954年に卒業し、奨学金を得てオックスフォード大学に留学することとなり、同行し、自分もオックスフォードのラスキン校で絵画を学び直している。この時最初の子、エリザベスを出産している。後章（アップダイクの結婚生活について）で述べるが、この出産時のことを素材にし、アップダイクは「死に瀕した猫」（“A Dying Cat”）⁽¹⁰⁾ を書いている。メアリーはアップダイクの母親とはあまりうまくいかなかった。また、夫のアップダイクとも、たがいに嫌いではなかったのに、二人ともにより良い生活をと考えて、1974年に別居し、76年に正式に離婚し、それぞれが良い伴侶を持つこととなった。

アップダイクがこのメアリーと出会うのは彼が二年生の秋、「中世美術史」というクラスを取った時である。二つの短編小説（「美術館と女たち」（“Museum and Women”）と「僕の最高の幸せ」）にそのことが描かれている。ただし、後者の中では、言及されるだけだが、主人公の「僕」がシカゴで待つ女友達の許へ期待をこめて友人の車で出発するという物語に少し出てくる。その女性は美術史のクラスでいつも一番前に座っていた知的な美女となっていて、「僕が申しこめば、いつでも結婚してくれる女性」⁽¹¹⁾ と書かれている。

メアリーとの出会いと、その後の求愛を素材とした短編は1967年に『ニューヨーカー』誌に発表された「美術館と女たち」に詳細に語られている。この短編はアップダイクの生涯に影響を強く与えたと思われる女性たち（母親、最初の妻、そして後の愛人たち）を主題とした四つの挿話から成り立っている。第二の物語がメアリーと思える女子学生を主人公としたもので、その冒頭をアップダイクは次のように描いている――

後にぼくの妻になることになる女性はぼくがあがっていく美術館の石段の一番上に立っていた。肌を刺すほどに寒く、積った雪が石のようにかたまるほどなのに、彼女は小さな足指が突きでている古ぼけたスニーカーをはいていた。そして、彼女は煙草をすっていた。(11)

とあって、次に続く会話から二人が初めてこの美術館（これはハーヴァード大学構内にある美術館）で言葉を交わしたことがわかる。二人は共に「中世美術史」のクラスに出ていて、主人公のデイヴィッドは後列の目立たない列に座り、彼女はいつも前列に座っていた。（この描写からも、すでに述べた「僕の最高の幸せ」の中の描写と一致することから、おそらく作者自身の体験だったのだろう。と推測できる）。

また、この主人公の女性（メアリーをモデルにしたものだろうが）が外見の装いなど気にもかけない知的な女であることも彼女の言葉のはしばしから推測できる。時はおそらく秋学期の終り頃で、ケンブリッジでは非常に寒い時期であるのに、女性は普通的女子学生がはくブーツとは違い、破れたスニーカーをはき、しかもその先から足指が出ている。それを見て、主人公はとても可愛い指と考え、こう書いている――

……ぼくはその指先に触れ、そっと撫でてあげたいと思った。この女性、大学の美術館の申し子のような色の白い女性の中に、ぼくをぐいぐいと引き付けるものがあつた。彼女には無垢な悲しげな空白感が具わっており、ぼくはそこに自分の名前を刻印のように記しておかなければいけないと感じた。(12)

初めての出会いなのに、主人公は女性の後について美術館を巡りはじめ、彼女の美術への知識の豊かさに驚き、美術館を背景として共に会話を楽しむ。その後も、二人はデイトを重ね、よく二人して歩き、よく美術館を巡る。一度はボストン美術館まで出かけていき、会話をする。主人公は小さい頃から吃音癖があり、女性とはうまく話せないのに、この女性といるとよく話すことができ、彼女が聞き役となってくれる。アップダイクはその様子を実にうまく次のように書いてくれる――

……ぼくたちはよく歩いた。一時はぼくたちが一緒にいることのできる唯一の隠れ家は美術館となっていた。ぼくの求愛も少しずつ進んでいた。ぼくたちはまじめによく話した。子供の頃、ぼくは無口で、気弱く、悪い予感だけに悩まされてきたから、この時は話したいことがいっぱいあった。彼女は聞き役だった。彼女はまるで花瓶をいっぱい置いてある部屋のようなだった。中へ入れば、あたりに漂う静かな、ぼんやりとした期待を感じ、ぼく自身についての感覚が突然とぎすまされたようになる。⁽¹³⁾

この女性は主人公デイヴィッドにとって格好の存在だった。受容し、かつ批判的。後にアップダイクが対談集の中で述べるように、メアリーは彼の書く作品の最高の読者で、常に適切な批評をしたという。事実、彼女の経歴上でもアップダイクと離婚した後、彼女は『アトランティック・マンスリー』誌の第一査読者という職についているほど有能だった。

作品に描出された女性から推測できるように、メアリーはアップダイクの高校時代の女友達（ノラ）とはずいぶん違っている。冷静で、男友達に溺れることがない。だが、二人は強い共感を抱いたようである。それは「僕の最高の幸せ」で書かれているように、1952年の大晦日からお正月にかけて、アップダイクはシカゴの彼女の家を招かれ、泊っている。そして、二人は「父の涙」の中で描かれているように、1953年の四月、復活祭の休暇をおえた折にはアップダイクの完全な恋人となっており、ペンシルヴァニアから戻ってきた彼をボストンのバックベイ駅で待つ女性となっている。主人公はプラットフォームでその女性に抱擁される――

……女の子に――いや女に――グレイのコート、キャンバス製のテニスシューズをはき、ポニーテイルの髪をした女にぼくは抱かれる。⁽¹⁴⁾

と、アップダイクは書いている。彼女こそ彼をシリングトンの田舎町から広い世界へと連れだしてくれる「完璧な女性」だと、彼は感じたに違いない。

二人は結婚前にアップダイクの実家を訪れているが、その場で彼の母親と微妙な対立をメアリーは示すことになるが、そのことを含め、二人の結婚生活から生れた数多くの物語については、次の章にゆずることとする。

1953年6月、二人はケンブリッジの市役所で結婚する。新婚旅行は、アルバイトを兼ねて、中・高校生用のサマーキャンプの付添人としてニューハンプシャー州のウィニペソーキー湖にある島へ行った。

【注】

- (1) “Norman Mailer vs Nine Writers”. In *Esquire*. 1963. July., P. 67.
- (2) John Updike, “The Walk with Elizanne” in *My Father’s Tears* (New York : Ballantine Book, 2009), p. 48.
- (3) _____, “The Happiest I’ve Been”, in *The Same Door* (New York : Alfred A. Knopf, 1959)
- (4) *Ibid.*, p. 43.
- (5) *Ibid.*, p. 44.
- (6) *Ibid.*, p. 46.
- (7) John Updike, *Self-Consciousness* (New York, Alfred A. Knopf, 1989), p. 37.
- (8) _____, “The Christian Roommates” in *The Music School* (New York : Alfred A. Knopf, 1966)
- (9) _____, *More Matters* (New York : Alfred A. Knopf, 1999) p. 768.
- (10) _____, “A Dying Cat” in *Pigeon Feathers* (New York : Alfred A. Knopf, 1962)
- (11) _____, “The Happiest I’ve Been” in *The Same Door*, p. 241.
- (12) _____, “Museum and Women” in *Museum and Women* (New York : Alfred A. Knopf, 1972) p. 7.
- (13) *Ibid.*, p. 8.
- (14) *Ibid.*, p. 10.
- (14) John Updike, *My Father’s Tears*, p. 196.